

ケアの現場にあふれるエピソードの数々 第2回「忘れられない看護エピソード」発表

「看護の日」の5月12日(土)、日本看護協会ビル JNA ホールにおいて、厚生労働省と日本看護協会主催の第2回「忘れられない看護エピソード」表彰式が開催された。全国から寄せられた約3000にも及ぶ作品の数々から、あらためて「看護とは何か」を振り返るきっかけとなるような、思い出深いエピソードを綴った作品が選ばれている。

昨年に続き2回目となった今回の「忘れられない看護エピソード」は、2011年11月から今年2月まで、看護の場面で出会った忘れられない思い出やエピソードを募集。全国から一般部門と看護職部門あわせて2952作品が寄せられた。そのなかから最優秀賞、内館牧子賞、優秀賞、入選が選ばれ、表彰式では最優秀賞と内館牧子賞の受賞者表彰をはじめ、特別審査員の内館牧子氏による講評や、ゲスト審査員の森本レオ氏によるトークショーなどが行なわれた。

看護をする側、受ける側 双方から見た看護

看護職部門の最優秀賞には、自身が海外生活で体験した、伝えたいことが伝わらないもどかしさと、新人時代に出会ったALS患者さんとの意思疎通の難しさ、そして伝わった瞬間の喜びを重ね合わせ綴った、埼玉県在住の佐々木敦子さんの「伝わる瞬間」が選ばれた。

一般部門の最優秀賞は愛媛県在住の森田欣也さんの「楽しい話とすてきな笑顔と安心を」。18歳で頸椎損傷により四肢の自由を失った作者が、20年以上前にはめずらしかった訪問看護師との交流と、看護師に勧められた俳句で世界を広げてきた体験を描いた作品だ。

また、看護職部門で内館牧子賞に選ばれた福井県の徳田のぞみさんは、余命わずかと宣告された母親の看取りを通じて、母親から受け取ったメッセージと思い出、母への思いを「二度目の戴帽式」として綴った。

一般部門の内館牧子賞には、奈良県の中井雅博さんの「靴音」が選ばれた。現在医学生である作者は、かつて祖父の最期を看取った病院の担当看護師との会話から、人間としての深さに触れ、看護師とは、医師とは、と考えたエピソードを描き出している。

このほか、優秀賞、入選には東日本大震災での経験を綴った作品も見られた。被災地で自らも悪性リンパ腫に侵されながら仮設風呂設営のボランティアをしていた男性とのやりとりを描いた作品、震災直前に入浴介助をした男性が津波で亡くなったと知った看護師が、自分が一緒だったら助けられただろうかと想像する作品、そして一般部門からも被災地で働く看護師の姿を描いた作品が選ばれている。

看護観をあらためて 見つめ直す機会に

看護職であってもなくても、それぞれの「忘れられない看護のエピソード」は、人と



人のつながり、人の心の温かさ、ケアを通じて通い合った心などが根底にある。

現場で働く多くの看護師が、忙しすぎて一つひとつ振り返ることもできないそれぞれの看護体験のなかにも、通じるものがあるはずだ。現場の看護師たちに自らの看護をあらためて振り返ってもらうためにも、看護観を意識してもらうためにも、一読の価値は十二分にある。どれも原稿用紙2枚程度という文字数に凝縮された、まさに珠玉の作品たち。読み始めれば引き込まれ、あっという間に読了していることだろう。

受賞作品や授賞式の様子は、日本看護協会のホームページで見ることができる。

<http://www.nurse.or.jp/home/event/simin/episode/index.html>

(構成/神保康子)